

<私>時代のデモクラシー

市民による新たなアソシエーション活動を拓くために

東京大学社会科学研究所教授 宇野 重規

◆はじめに

私は2010年に『<私>時代のデモクラシー』というタイトルの本を書きましたが、なぜ「私」がキーワードになるのかということからお話したいと思います。

皆さまもよく覚えていらっしゃると思いますけれども、「ナンバーワンにはならなくてもいい、もともと特別なオンリーワン」という歌詞の『世界に一つだけの花』（SMAP）が2003年に大ヒットしました。一人ひとりが違う、かけがえのない存在であることを歌った曲ですが、多くの方が感動したのではないのでしょうか。また、この曲を作詞・作曲した槇原敬之さんは1991年に「どんなときも、どんなときも僕が僕らしくあるために」という歌（『どんなときも。』）も作りました。

こうしたフレーズが広く受け入れられることは、何を意味するのでしょうか。誰もが自分が自分らしくありたいという言葉に非常に敏感になり、また、そういう言葉に違和感を持たなくなったことが、今日の時代を読み解く鍵なのではないだろうか。そう考えたのが、『<私>時代のデモクラシー』を書いたきっかけでした。

◆平等意識の変化

思えば、平等という概念の使い方は難しくなりました。今日でもなお、世の中には人を隔て、見下し、否定するなど多くの差別があり、平等概念の意義に変化はないと言えるでしょう。しかしながら、平等に対して今日、意識の変化が見られます。例えば、私が教えている二十歳前後の学生に、君らはみんな平等なんだよと言っても喜ぶのではなく、むしろ、ネガティブに捉えます。むしろ、自分は違った存在、少なくとも平等に他の人と同じ程度には違った存在であると認めて欲しいといった、矛盾した要求があります。

かつて身分制やはっきりとした階級があった時代においては、人間はみな同じく平等なんだ、どんな階級に属そうが、どんな身分に属そうが同じ人間なんだという言葉は、救済や解放の意味を持ちました。しかし、平等化が進むほど、人はむしろ他の人と自分は違うことを言いたくなってきたわけです。他の人間と同じであるというだけでは全く納得しない。人と自分との違いに、とても敏感になる。あの人はなんであんなに恵まれていて、私はこうなんだというときに、あの人は努力したからだとか、それなりのリスクを取ったからといった説明で半分納得しても、半分は納得できない。それが今日であると捉えています。



◆伝統的な結びつきからの解放

ここで伝統的社会を想像していただきたいと思います。ある地域に生まれれば、なかなかその地域とのつながりは切れませんし、ある仕事に就けば、その職業集団、半ば身分制集団と結びついて人生を送りました。それはある意味で拘束ですが、こうした多様なしがらみに縛られて生きてきました。

ですから、近代の最初の一步は何かというと、地域や家族、身分や職業等の伝統的なしがらみから個人を解放することでした。もちろん、伝統的な社会が全て悪かったとは思いません。ある集団に属してれば、もちろん完璧ではないけれど生活を守ってくれる側面もありました。地縁、血縁集団に属していれば、かわいそうだと思ったら助けてくれるし、仕事を斡旋してくれたり、怪我をしたらみんなでケアしてくれる。ですから、しがらみから解放されるというと聞こえはいいですが、裏を返すと守ってくれるものがない、自分で自分の身を守らねばならないというのが、近代のお約束になってくるのです。

しかしながら、人間の人生というのはアクシデントの連続です。病気になったり、事故に遭ったり、いろいろなことがあります。みんなが働いて、ちゃんと稼いで自己責任で生きていけるとは思いません。ですから、近代国家というのは個人が全てのリスクを負うのではなくて、病気や事故や失業といった個人のリスクを一定程度、社会保険や社会保障が補ってくれる。こういう仕組みが近代社会の一般的な方向性でありました。

◆社会問題の個人化

また、かつてと違い、自分で好きな職業や人生を選べるようになります。これは近代社会のまさに福音です。しかし、実際には進学校の選択、受験といったものの繰り返しによって人生が決まってしまう。そ

のことは本当に福音であると言われているのだろうかということになります。特に、今日、失業その他の問題がなかなか説明し難くなってきています。ある人が失業に陥ったとすると、それはもちろん社会構造的な原因があります。しかし、同時にそれは、その人のパーソナルヒストリー、ライフヒストリーの側面がどうしてもあります。

このことが如実に表れるのは、事件が起きたときです。かつては犯人がどこの地域の出身で、貧困や親との関係などによって、ある程度類型化し動機等が説明できたのですが、今日はどんどん背景が個人化してきています。こうした状況を指して「社会問題の個人化」といっています。親との関係でトラブルを起こして、その結果として人間関係に悩みを持ち、さらに社会の適応がうまくいけなくなったというような人は何百万といえるでしょう。しかしながら、かつてのように「労働者よ団結せよ」というように呼びかけても、みんな集まって一緒に同じ運命を共有しているから、共に解決しようとはなりません。むしろ、一人ひとりの個人的な問題だと言われてしまいます。

一人ひとり自分が自分らしくありたいという思いがある一方、多くの問題は全て個人のライフヒストリーの問題で、全部自分で多くの社会問題を背負えと言われると、しんどい。恐らくこの両義性が今日の多くの問題を解くときの鍵だろうということで、私はこれをあえて、「私」時代とか「私」問題と言っています。いい意味でも悪い意味でも「私」が出てきてしまいます。

◆近代の折り返し

こうした時代に民主主義をどう考えたらいいのでしょうか。民主主義というのはもちろん、私たちの問題を私たち自分自身の力で解決することです。けれども、今日、誰が私たちなのか。私は一体誰と手を組んで、共通する私たちの問題を私たちで解決しようと言えるか。よく分からなくなってしまっています。このような時代において、民主主義というのは果てしなく困難になるのではないかというのが私の問題意識です。

ウルリッヒ・ベック（1944-2015）という有名なドイツの社会学者がおります。「リスク社会論」を定義して一世を風靡しました。彼は、リスクという問題は明らかに、多くの人に共通しているのですが、一人ひとりにとってみると気が付かないうちに通り過ぎりの人のように、すーっと自分の人生に入ってくると説きました。例えば、親との関係がうまくいかなかった、中学受験を失敗したなど、本人にしてみると、たまたま失敗したと受けとめます。もちろん、これが決定打ではなくて、何とかなるさと頑張ります。しかしその後も駄目だ、駄目だという思いをくり返すうちに、だんだんその人の中に深く深くリスクが入り込んでいって、気付いてみると、もうこのリスクに対し自分はどうにもならないという重苦しい気分になる。そして、

こうなったのは自分の責任なんだ、自分が悪いんだという考えが心の奥に巣を作って居座ってしまう。こうなると、なかなか解決するのは難しくなります。

こうしたことを考えますと、今日は、近代の一つの折り返し点にきているのではないかと思うわけです。近代社会において、個人を伝統的なつながりから解放するというプロジェクトがある程度うまくいったからこそ、個人は今やつながりのなさに不安を覚えているのです。そしてむしろ、つながりを欲しています。

◆日本の中間団体の解体

ちなみに日本社会に関して、どういうことがいえるでしょうか。90年後半ぐらいから格差社会論が言われるようになりました。それ以前は日本総中流社会論というのが支配的でした。社会学的に見ると全然、あの時代は総中流ではありません。にもかかわらず、あたかも、そうであるように思ってしまったのは何だったのでしょうか。

これにはいろいろな仮説があってそう単純には言えませんが、一つ言えるのは、日本的な会社とか業界が共同体としてそれなりに機能していた。多くの人は自分の会社や業界の中にいる限りにおいては、一定程度の相対的な平等性は担保される。実は同じ会社の中でも十分に格差はあったのですが、あたかも一つ一つの会社や集団が閉じられた共同体のように感じられ、その中で一人の人生が完全にそこに自己完結するように見えた結果、相対的には不平等が見えにくい社会でした。

ところが、80年代から90年代にかけて、日本の中間集団がだんだん解体を始めます。企業や業界が一生涯、個人の面倒をみてくれなくなるわけですが、自己責任の言説が強まるのと、冒頭申し上げた私が私らしくという意識が、社会科学的にみると、軌を一にして生まれてきたといえます。

◆「アソシエーション」という言葉の誕生

19世紀のフランスの貴族で、アメリカを旅して、『アメリカのデモクラシー』という本を書いたトクヴィルという政治思想家の研究を、私はしてきました。フランス人であれば身の回りで問題が起きたら、パリにある中央政府に頼む、国家権力何とかしてくれとなります。ところが、当時のアメリカは連邦政府も州政府もまだ弱いため言ってもどうにもならない。そのため地域に暮らす人々が共に自らの課題を解決するしかありませんでした。彼はこうして生まれた問題解決の技術、技法こそがアソシエーションだと本書で説きました。

トクヴィルが観察したアメリカ人はこうです。この地域に病院がないじゃないか、どうしよう。政府に頼むか。そんなの100年待たたってどうにもならないよ。じゃあ、みんなで少しずつお金を出して病院をつくっ

て、お医者さんと呼んでくればよい、お医者さんを育てればよい。

このことを説明するためにトクヴィルはアソシエーションという言葉を作りました。フランス語でコルポラシオン（コーポレーション、コープ）とアソシアシオン（アソシエーション）は意味がはっきり違います。コルポラシオンの意味は団体です。それも伝統的な身分制的なものを含む団体です。伝統的な地域だったり中間集団を一般に指してコルポラシオンといったわけです。アソシエというフランス語は、人と結び付くという意味ですが、個人が自発的に横につながって一緒に協力することをアソシアシオンといいます。伝統的な社会学とか歴史学では社団（コルポラシオン）といいますけど、社団ではなくて個人が目的に合わせて、必要に合わせて団結し協力する集団のことを伝統的な中間集団と区別してアソシアシオンと言いました。

◆新たな市民社会論

90年代ぐらいから世界は大きく変わりました。特に大きかったのは東欧民主化でしょう。ベルリンの壁が崩壊し東欧が民主化していく中で、全てが国家によって動かされる時代は終わりました。かといって、全てを市場経済、市場メカニズムで解決するだけでは足りない。むしろこれからの時代は、第三の領域が大切ではないのかという議論が世界的に力を持ちます。

この90年代の新しい市民社会論、あるいは公共性論の思想的な中心人物であったのはトクヴィルでした。アソシエーションは今日で言えばNPOと言ってもいいと思います。国家に属する組織でもないし、企業のような営利組織でもなくて、人々が自分たちの生活のニーズを満たすために互いに協力して作り出していく。そしてこの種のアソシエーションが集まることによって社会をつくっていく。こうしたアソシエーションをつくり出す公共圏、市民社会こそがこれからの社会を動かしていくのではないのか。国家の力と市場の力と第三の新しい市民社会の力、この三つがバランスを取ってこそ、今後の冷戦終焉以降の世界は動いていくのではないのか。こうした見通しが大いに語られました。トクヴィルは非常に注目される思想家として、今日、復活しているわけであります。

もちろん、ベルリンの壁崩壊が30年を経た今日まで、現実にはそれほどハッピーなことばかりではなかったと思います。まだまだアソシエーションをつくり出す第三の領域というのは未成熟です。しかし、それは市場経済の論理があまりに人々の生活に影響を与え過ぎてしまったためであって、これに対抗する力が必要なのです。国家の力だけで市場をコントロールすることは無理である以上、第三の領域は絶対に必要であると私は主張していますが、周りの反応はまだ苦いものがあります。

◆コモンズの悲劇

今、現代社会などの教科書を開くと、「コモンズの悲劇」という経済学の議論が必ず載っています。この場合のコモンズは共有地と訳されます。かつて共有地があって、そこに多くの人たちが牧草を刈り取って使っていました。ところが、だんだん資本主義化が進んでくると、みんなの分を取ってしまう人間が出てきます。たちまち、この共有地がぼろぼろにされてしまいます。ならば市場の論理で、私的所有に分割するしかないのか。それとも国家が管理するしかないのかという議論のことを「コモンズの悲劇」といいます。現代において、なお共有地は可能かということであります。

私はアソシエーション論とコモンズ論というのは似ているところがあると思っています。政治思想史にコミュニティアンという言葉があります。これは文字通りコミュニティ、共同体を大切にしようとする思想です。しかしどこかしら集団の閉鎖性というのを前提にしています。一定のメンバーシップがあってメンバーは固定的で、その中でお互いに協力していくモデルがあります。

◆アソシエーションの未来

今日、求められているのはメンバーを開いて、多くの人が入り自由になりながら、相互にルールや規律をもたらし、一定の共有財産を共に管理していくことではないでしょうか。アソシエーションも同じです。人々が、その目的に合わせて自分と平等な立場の他の個人と協力して、何らかの自分たちの身近なところの問題を解決するための組織であって、一番大切なのは出入り自由であることです。

しかしながら、日本では本来コモンズで始めたものが共同体化して、いったん入ったら出られなくなるということが結構あります。組織モデルにコミュニティアンが強いものですから、そこは難しいところです。

多様なアソシエーションに属し、出たり入ったりしながら自分たちの生活を充実させ、また協力する関係を持っていく上では、責任を持つことも重要です。拙著『民主主義の作り方』（2013）では、多くの人々が自分の身近な所で何らかの実験をしていく、そして、そのような多様な実験が開く社会こそが民主主義であるということを書いています。個々が一つの民主主義の下に、一つの民意で全てを決定するのではなく、もっと小さなところで、ある場所でこれをやりたい、これがいいんだと思った人たちが集まって、何らかの社会実験をし、社会全体としては多様な社会実験を応援する。社会を挙げて革命を起こして一つの大きな実験をするのではなく、いろんな所でいろんな人が自分たちの持ち場で実験をする社会を強調しました。それを補うのがアソシエーションであり、そしてコモンズであると思っています。

（うの しげき）